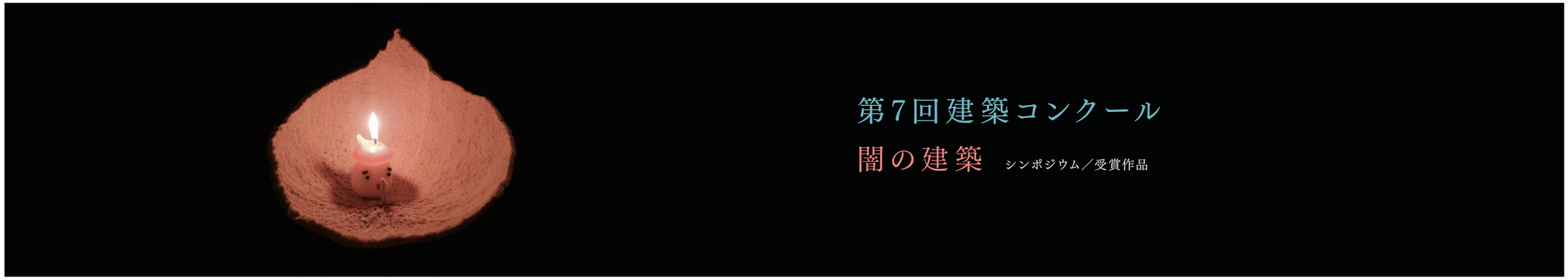


第7回建築コンクール
闇の建築　シンポジウム／受賞作品

公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部主催

製作・発行
公益社団法人 愛知建築士会名古屋北支部
http://nagoyakita.asanet.or.jp/　http://kenchiku-concours-758n.org/

第7回建築コンクール「闇の建築」 2016年12月発行　200円（税込）

はじめに

（公社）愛知建築士会名古屋北支部が主催する建築コンクールは、第8回を迎える事になりました。本年度よりシンポジウムを名古屋で開催する節目の年です。そこで、少しでも多くの方に建築コンクールの狙いである「建築の定義を広げる」を知っていただけるよう、建築コンクールを冊子にすることにしました。

昨年のテーマは「闇の建築」。5人の建築家の回答と受賞作品の講評をお楽しみください。

第7回 建築コンクール シンポジウム

シンポジウム開始のあいさつ／古谷誠章

本シンポジウムは建築コンクールのテーマ解説を兼ねてコンクールと連動して行われています。テーマは毎回シンプルですが、シンプルであるが故に難解であり”応募者のみならず審査員も共に悩む”という他にはないコンクールです。シンポジウムと公開審査会を行うことで、建築の意味を拡張して考えたり見直したりすることができます。

それによって、現在の建築が直面する問題に対して、なにか別のヒントを与えてくれるのではないかと思っています。真っ向から建築の抱える問題に相対するのとは少し違いますが、遊び心やユーモアを持ちながら審査を行い、違った角度から建築をあぶり出してみようというものです。

今日のシンポジウムでは、5人の審査員にそれぞれ5枚のスライドを用意していただき、各々が考える「闇の建築」を解説していただきます。

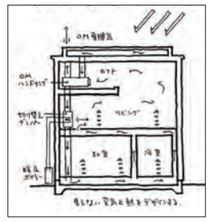
伊礼智 建築家

琉球大学理工学部卒業。東京藝術大学美術学部建築科大学院修了。丸谷博男+エーアンドエーを経て、1996年伊礼智設計室設立。2004年「東京町家」を東京の工務店3社と展開。2006年「9坪の家」、2007年「町角の家」でエコビルド賞受賞。著書に「伊礼智の住宅設計作法」（新建新聞社、アース工房）、「伊礼智の住宅設計」（エクスナレッジ）などがある。

I-1 影が主役

I-2 光が主役

I-3 光も闇も等価



I-5 見えないものをデザインする

I-1 光と影 石元泰博「シカゴ 街」1956-61

高知県の写真家、石元泰博氏のシカゴの写真です。影だけで表現していて、完全に影が主役になっています。民家の小屋組なども同様で、闇のなかに浮かび上がる構造体はとても力強く、魅力があります。闇（影）だけで語ることのできる建築だと思います。

I-2 沖縄の住宅（中村家）

訪れた時に急に雨が降ってきました。ただでさえ暗い室内がさらに暗さを増し、額縁で切り取った外の景色が光であふれてくる。このような、影で光を切り取るという手法も魅力的だと思います。

I-3 ルネ・マグリット「光の帝国2」1950

この絵では、光も闇も等価な感じがします。昼と夜のあいだのような瞬間、光と闇のはざまで、ある一瞬だけでも魅力を持つ、そんな建築空間があり得るのだろうか？と問いかけを含めて提示しました。

I-4 人形浄瑠璃の黒子

黒子とは見えているのに見えていないことになっている影の役割。それでいて黒子がすべてを仕切っている。そういうシステムというか建築があってもよいのではないでしょうか。

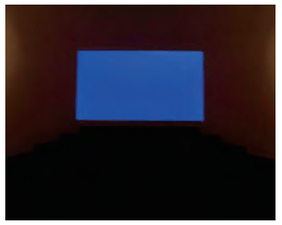
I-5 奥村昭雄氏のことば（見えないものまで設計すること）

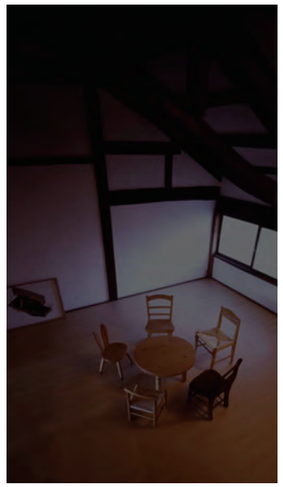
空気、熱、におい、手触り、足触り、そういうものまで魅力的に建築として表現できるようなものを期待してます。

中村好文 建築家

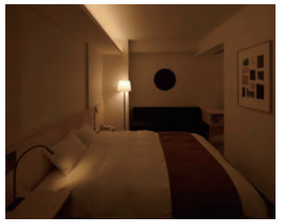
武蔵野美術大学建築学科卒業。1972年宍道建築設計事務所。1975年東京都立品川職業訓練校木工科。1976年吉村順三設計事務所。1981年レミングハウス設立。1987年第1回吉岡賞受賞。1993年第18回吉田五十八賞特別賞受賞。日本大学生産工学部建築工学科教授。
著書に「住宅巡礼」(新潮社)、「普段着の住宅術」(王国社)、「住宅読本」(新潮社)などがある。

まずはじめに、闇に対するキーワード、闇の性質のようなものはないかと考えました。闇にはある種の神秘性、神話性があるだろうと思います。そういうものを感じさせるものをピックアップしました。


II-1


II-2

II-3


II-4

II-5

II-1 ジェームズ・タレル「月の裏側」1999

「闇の建築」というテーマで真っ先に思い浮かびました。闇の中から四角いブルーのフレームが浮かび上がってくる。闇がないと成立しない作品です。

II-2 熊谷の民家改修

養蚕民家のお蚕(かいこ)さんの部屋だった空間を利用できるようにしたプロジェクトです。屋根裏の真っ暗闇のなかに、わずかな光がもれているのが幻想的で、そこに物語性を感じました。ゲストルームへ改修するにあたり、安直に部屋に入っていくのではなく、屋根裏の闇を通り抜けたあとに部屋にアプローチするという手法を用いています。深い森のなかを彷徨ったあとに、異国の小人の国に出てしまうようなイメージの作品です。

II-3 フィリップ・ジョンソンのゲストハウス

ゲイの友人と過ごすための空間で、真っ暗な状態から光が微妙に変わっていく照明計画がすごくよいです。闇に隠匿性やセクシャルなイメージを感じさせる作品です。

II-4 ホテルの客室

ビジネスホテルの客室を改修した事例です。真っ暗な状態から通常の明るさまでスムーズに調光でき、実用的であり、かつリラックスできる空間としています。

II-5 蜘蛛の巣

上越の蔵の中で見た幻想的な風景です。真っ暗な古い蔵のなか、一条の光に浮かび上がった蜘蛛の巣がすごく建築的に見え、「闇の建築」を連想しました。

栗生明 建築家

早稲田大学大学院理工学部研究科修士課程修了。1973年(株)槇総合計画事務所。1979年(株)都市建築設計事務所Kアトリエ設立。1987年(株)栗生総合計画事務所。1996年日本建築学会賞作品賞受賞。1999年ケネス・F・ブラウン・アジア太平洋建築デザイン賞受賞。2002年第43回建築業協会賞(BCS賞)受賞。2003年日本芸術院賞受賞。2005年第8回アルカシア建築賞ゴールドメダル受賞。2010年第12回公共建築賞受賞。

III-1 ナイトサファリ

写真は1994年に開園したシンガポールのナイトサファリです。この動物園では、動物たちの姿かたちは見えないけれど、暗闇の中で目だけが光っていて、あちこちから唸り声が聞こえてきます。動物園という人工的な建築の中にいながらジャングルに入り込んだような感覚に恐怖を感じます。

III-2 キリン

夕闇に写し出されたキリンの首がゆらゆら揺れている様は影絵を連想させ、非常に幻想的な感覚を抱きます。

III-3 植村直己冒険館

地上に突き出ているトップライトが夜間には内照式のサインのように浮き出てきます。建物だけではなく、周辺の暗闇のなかでこそ感じることのできる建築です。

III-4 国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館

暗闇の水盤に70,000の光がゆらぐ様が印象的な建築です。

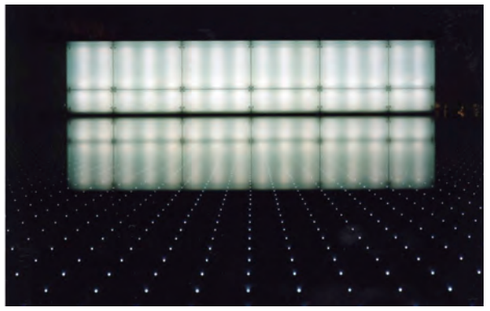
III-5 2冊の本
長谷川堯「神殿か獄舎か」「建築－雌の視角」相模書房

身体性を重視し、視覚よりも触覚や聴覚など、暗く閉じ込められたような胎内感覚に近いところから着想していくことを説いています。地下建築とは神話で言う「黄泉の国」にあたり、人々はそこから光を求めてはい出てくるのではないかという感覚、人間の原始の考え方や感じ方を教わりました。この2冊の本に建築家としての立ち位置を突き付けられ、それまで鳥瞰図的に見ていたものを、虫の目で見られるようになりました。これが今回のテーマ「闇の建築」のイメージと重なりました。

III-1

III-2

III-3


III-4

III-5

千葉大学大学院工学研究科修士課程修了。1988年有限会社青木繁研究室。1996年有限会社江尻建築構造設計事務所設立。
2010年日本構造デザイン賞受賞。 2013年第14回日本免震構造協会作品賞受賞。
長岡造形大学教授。

IV-1

IV-2

IV-3

IV-4

IV-5

IV-1 アリの巣、地下壕、炭鉱、洞窟

アリは真っ暗闇の中で縦横無尽に自分の住みかを作っている。まさに闇の建築ではないかと思います。大谷石の博物館、巨大で暗い石切り場がすごく印象的でした。炭鉱は放置しておくと、陥没して空洞が地上に現われてくる。別の見方をすると暗闇の空洞が長い年月をかけて地上に移動してくるように見えて少し不思議な感じがします。

IV-2 インスタレーション

暗闇のなかで構造体が浮かび上がっている作品です。木のブレース、タイル、空気膜、ブロック、透けるコンクリートブロック、竹ひご、様々な構造体を用いています。

IV-3 屋根裏架構のデザイン

築300年～400年のお寺の屋根裏架構。真っ暗闇の屋根裏の一部に換気用の小さな開口があり、そこから見える眺めが感動的でした。

IV-4 グレーな建築

木造組積造は構造上認められないため、柱として鉄筋を使用し実現しました。アルミニウムのパンチングについて、アルミニウムは構造材として認められていますが、穴あきがよいかどうかは判断の分かれるところかもしれません。竹集成材は梁として使用しています。

IV-5 バングラディッシュバンブープロジェクト

竹を使用した実験住宅です。日本では竹は構造材として認められていません。これから光をあててほしい材料です。

早稲田大学大学院博士前期課程修了。1994年八木佐千子と共同してNASCA設立。2001年有限会社ナスカー級建築士事務所。1991年第8回吉岡賞受賞。1999年日本建築家協会新人賞受賞。2007日本建築学会賞作品賞受賞。2007年日本建築家協会賞受賞。2011年日本芸術院賞受賞。早稲田大学教授。著書に「shuffled-古谷誠章の建築ノート」（TOTO出版）「がらんどう」（王国社）「マドの思想」（彰国社）「建築家っておもしろい」（文屋）などがある。

V-1 真っ暗闇に建つ図書館

夜になると真っ暗闇になってしまう場所に計画した図書館です。建物に灯った明かりが自然に周辺を照らし出し、地域の人々にも安心して使ってもらえるような建築を目指しました。

V-2 工場のトラックヤード

操業後になると真っ暗闇になってしまう工業団地に建つトラックヤードです。フットライトを活用して建物を浮かび上がらせています。

V-3 サウンドシェルター

被災地の復興の森に造った森の音を聴くための空間。闇の中で視覚が遮断されると聴覚が高まってきますので、夜の闇の中でこそ、より効果が発揮されるのかもしれません。

V-4 理工学部の中庭

ベンチの下に間接光を配置して、暗闇の中庭にほどよい明るさをもたらしています。

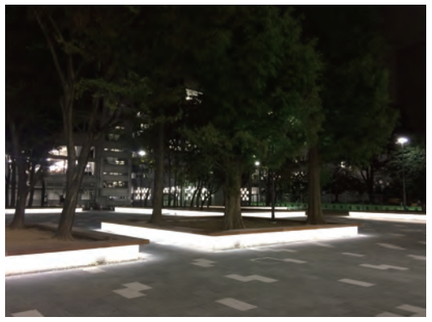
V-5 計画中の福祉施設

クリニックとデイサービスと地域センターが併設される地域の中核施設です。2ｍの積雪があっても屋根上のハイサイドライトから採光を取込むことができ、夜間は周囲に光を拡散することができます。

V-1

V-2

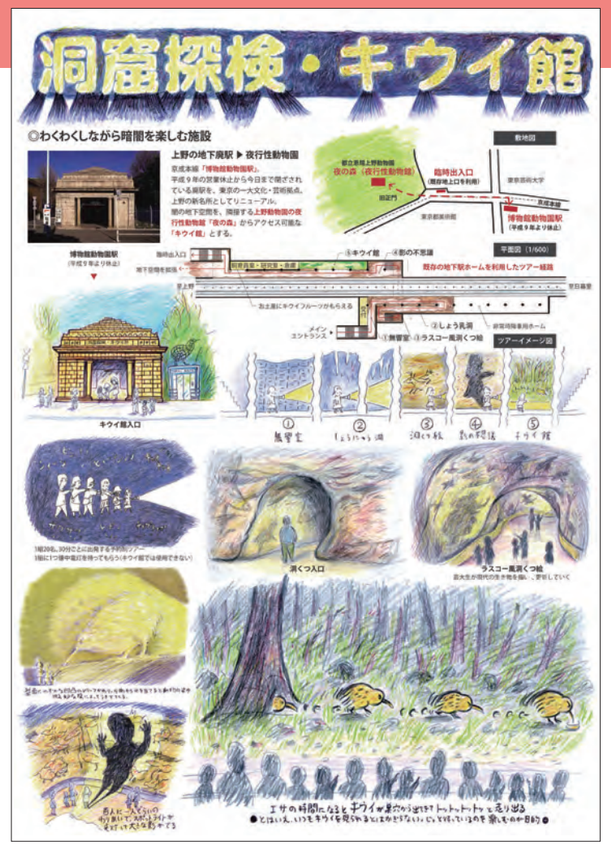
V-3



V-4

V-5

第7回 建築コンクール 受賞作品



最優秀賞

「洞窟探検・キウイ館」
文京建築会ユース+林丈二

上野の地下の廃駅を利用して夜行動物の動物園をつくる計画。様々なシチュエーションを経て最終的にキウイにたどり着くアイデア。

廃駅を利用するという場所の選定が非常に良いです。芸術と動物園を結び付けている点は、その楽しさがよく表現されていて、これはぜひ造りたいと思わせてくれます。場所が持っている意味と、闇の楽しさ、おもしろさといったポジティブな価値がつまっていて、人が参加した時のワクワク感もうまく表現されていて魅力的です。

初めに入口から入ると無響室があって、まったく残響がないシーンとした不思議な感じのモードにされて、それからいろいろな仕掛けを巡った最後にキウイがトットットと軽やかに出てくるというのは、演出的にも素敵で心情的にもとても共感できます。夜行性のキウイを取り上げている点も闇と関連付けられています。また、キウイが出てくるだけではなく、闇の中でスポットライトに照らされて自分の影が突如大きくなるといった、闇でなければできないことが色々なアイディアとして入っています。魑魅魍魎(ちみもうりょう)が出てくるようなお化け屋敷のようなイメージも連想されます。

闇をポジティブに表現していて「闇の建築」の課題に対してユーモアがありながらも真正面から「闇」にも「建築」にも答えているアイディア、表現が突き抜けている作品です。

優秀賞

「森湊灯台」上野浩一

山の神に捧げる森の献灯台の実作品。「暗闇」には両方「音」という字が入っています。 一説には「門を開いて神が訪れる」ことを表し「おと」ずれるの「音」ということです。神や祈りと闇との関係を考えると、この作品は闇の中で祈るということを含んでいます。漆黒の闇になるであろう外界とそれを結ぶための御燈明の役割を建築が担っています。灯りは暗闇を打ち払い照らしだすものと考えがちですが、これはここに人がいる、何かがあることを示すもの。灯台とはまさにそういうもので、真っ暗な大海原全てを明るくできないが、あちらに向かえばいいといったことを知る標(しるべ)になるものです。それは闇と一対になって存在しうるものです。夜になると活き様を発揮する建築という点もよいです。東京タワーや名古屋テレビ塔も御燈明のような存在で、どこからか帰ってきてライトアップされたそれらを見るとホッとするような心の拠り所になっていて、地域の中でそういうものは重要だと思います。

「川崎長太郎の物置小屋」大室祐介

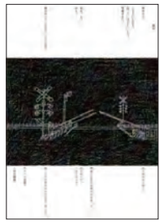
小説家 川崎長太郎が執筆活動をしていた小屋を再現した1/10スケールの模型作品。 物置小屋といわれるように、窓もトイレもキッチンもない完全に閉じた小屋、本当の暗闇です。生活するには公衆トイレを借り、外に食事に行く必要があります。蝋燭の灯りだけで執筆をする孤立した空間で、暗闇の中で自分の内面と向き合い作品を紡ぎだしていく。夏は非常に暑くてとても過ごせるような場所ではないところにこもり、長期に渡り執筆活動を続けています。達磨大師が壁に向かって9年間座禅したような一種の修行のような空間です。ここで書かれた小説がどんなものか読んでみたいと興味を引かれます。内藤多仲先生の研究室は照明が少なく薄暗かったと聞きますし、ドミニク・ペローの設計事務所も暗かった印象があります。緻密なものを考えたり、精神を集中するという点で、この作品に通ずるものがあります。闇のあり方として、人間と闇の関わり方の究極の姿のひとつといえます。

「camera obscura」富樫由美

ピンホールカメラの原理を利用した小さな箱の実作品。

中に入り外の世界を楽しむ装置。カメラオブスキュラはよく知られていますが、実際に作り本気でやっている所がよいです。パネル下部の写真はこの装置で実際に撮った写真です。以前、写真家の宮本隆司氏が大きなカメラオブスキュラをつくり、自ら中に入り感光紙を貼って撮影していました。長時間の露光が必要で途中出られないのですが、この作品も同じ原理でかなりの時間をかけて入っていないと撮れないものです。その長い時間を箱の中に写し出される風景を見ながら、ワインを飲みながら、酔っぱらいながら過ごす、という点がおもしろいです。いろんな場所に移動しながら実際にワインパーティーをやっていてとても楽しげです。ワインのコルクを抜く画と、ピンホールのコルクを抜く画が並べて描かれている点もユーモアがあります。闇とダイレクトなアイディアですが、完成度が高くしっかりとできています。

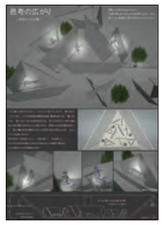
審査員賞



中村好文賞 ／「踏切」樺澤みずき

非常に詩的で、いろんな風にとらえられる作品です。家の近くにある踏切がモチーフで幼いころずっとみていたもの、とのことです。

作者の意図を知りたいと思いました。意図するところは人生の闇の話かと思いました。すごく既視感があります。こういうのを見たことがある人はいるのではないでしょうか。踏切の向こうが黄泉の国、彼岸と此岸を結びつける、ある種の結界。その偶像化と読めます。夢に悪夢も含め、そういう闇との連動性を感じます。また色を上手く入れ込んでいると思います。



栗生明賞 ／「思考の広がり」小川航輝

公園のグランドラインを少し掘り下げて、壁をつい立てて、その中に入って寛ごうというアイデアです。

荒川修作さんの養老天命反転地のように闇のテーマパークができるのではないでしょうか。ひとりひとりだけど、懐中電灯持ってまわり、闇の中で非日常的な体験をする。人がたくさん集って明るいところもあれば、ひとりポツンと暗がりの中で正面を照らしているところがあったり。いろんな仕掛けをしながらもっと大きなスケールに展開できると可能性を感じます。

人間が明りをもって動きまわり、場をつくっていくようなきっかけになりそうな気がします。

古谷誠章賞 ／「ウマリビト」森隆太

人型にくり抜いたスペースにはまって感触を楽しむ。それで伝わってくる感触もあります。

これは真っ暗なところで手探りでやると面白い。明るいところでは勿体ないと思いました。善光寺や禅叢寺の体内巡りにあるような、縁の下を真っ黒になりながらぐねぐねとずっと手で触って進んでいく中で、すっぽり身体がはまってしまうような窪みがあると面白いのではないでしょうか。最も「不思議」と、直感的に感じた作品です。

伊礼智賞 ／「みちしるべ」下岡健人

手すりです。触覚を表現している。目が見えない人のためのものです。

視覚障害者が歩く際、従来の足元の触覚でなく手で触りながら進んでいく。ただ道を案内するだけでなく、いろいろな情報を得られるものになっています。健常者が触っても楽しいものでないでしょうか。

例えば寒い時期には手すりが温かいとか、夏は冷えている、などの仕掛けに繋げていくともっと広がりを感じ面白いと思います。真面目に現実のものとして取り組んでいるのがよく、触覚にこだわっている部分に可能性を感じます。

江尻憲泰賞 ／「In The Cloud , On The Cloud 」ダルコ・ラドヴィッチ研究室

インスタレーションです。ボール状の透明な球体を繋げて構造としています。釣り糸のテグスを使い暗闇の中ではそれが消えるようになっています。

柔らかい光を球体にあてて反射させる。暗闇の中で光る球体が、闇を強く感じさせ、闇を顕在化させるものとなっています。明りや文字で闇を表現している「光る闇（他の応募作品）」もよいですが、「In The Cloud , On The Cloud」の方が球体（ビニールボール）を構造体として成り立たせているところがよいです。

あとがき

小さな支部が始めた建築コンクールは、8回目を迎えることができました。審査員の先生方、建築コンクールに参加してくださった全国の方に御礼申し上げます。コンクールを立ち上げた理由は、建築の賞をつくることで栄誉を与えられることと、営業的な手助けになればと考えたからです。

当初、支部の役員会では審査員は支部から選出し、作品は愛知県内から募集するなど、地元中心の意見がありましたが、誰もが受賞して喜ばれるものにするため、作品を全国から集めること、この人に評価されたいという審査員を見つけることがコンクールには必要だとして動き出しました。そんな中、縁あって中村好文さんと出会い、さらに古谷誠章さん、伊礼智さんの3人の審査員を迎えることができました。

このコンクールの最大の特徴は、毎回異なるテーマをかかげて作品を募集していることです。「小さな建築」、「翔んでる建築」や「これも建築？」などユニークなテーマがありました。禅問答のような難題テーマをもっと分かっていただこう、考えていただこうと、公開審査の前にはシンポジウムを開催、審査員が5枚の画像を使ってテーマを語る、この談論風発の内容が非常に面白く、お題がいかに難題かを審査員自ら証明することになりました。第6回の「支える建築」からは、審査員に栗生明さんと江尻憲泰さんを迎え5名の建築家による講評となり、さらに内容の濃いものとなりました。

最後に、毎回この活動を支えてくださる協賛企業、シンポジウムなどをバックアップしてくださる文京建築会の皆さまには心から感謝いたします。また、企画・運営に関しては、当時支部長であった加藤さん、前支部長の阿部さん、建築コンクール実行委員の皆が手弁当で働いてくれたおかげで現在まで続けることができました。感謝いたします。今後も建築コンクールを盛り上げていきましょう。

2016年10月
（公社）愛知建築士会名古屋北支部長
前建築コンクール実行委員長
浅井裕雄

後援

愛知県、名古屋市、（公社）愛知建築士会、（公社）日本建築士会連合会、（公社）愛知建築士事務所協会、（株）中部経済新聞社、
（公社）日本建築家協会東海支部愛知地域会、（公財）名古屋まちづくり公社名古屋都市センター

協賛企業

旭化成建材株式会社、一般財団法人愛知県建築住宅センター、株式会社確認サービス、OMソーラー株式会社、株式会社ＣＩ東海、
総合資格学院株式会社中部資格、株式会社タニタハウジングウエア、株式会社TJMデザインキッチンハウス名古屋店、株式会社マツナガ 、
株式会社山長商店 、ユダ木工株式会社 、gallery yamahon